

作為と不作為の理解に関する認知発達的研究

(中間報告)

京都大学 林 創

Cognitive developmental study about the understanding of commission and omission.

Kyoto University HAYASHI, Hajimu

要 約

本研究は、幼少期の子どもたちの「作為」と「不作為」の理解について、道徳的な判断の程度に差があるかどうかを検討するものである。「悪い行為」には、積極的な動作がある「作為」と積極的な動作がない「不作為」があり、一般に大人では、作為の方が不作為よりもより悪いと判断する「不作為バイアス」が生じることが知られている。発達的な研究によると、不作為バイアスは、年少で生じるものの、一度消失し、年齢が増すと再び現れるというU字 (U-shaped) 型の発達をすることが報告されているが、調査に改善の余地があり、課題等を厳密にした上で追試することにした。予備調査1で、課題状況を広く集めた。今後、予備調査2によって、子どもに用いることができる課題を精選し、本調査によって、不作為バイアスが生じる認知発達的な変化を明らかにする。

【キー・ワード】 作為, 不作為, 道徳的判断

Abstract

This study examines whether there is a developmental difference in moral judgments between acts of commission and omission. Previous studies have repeatedly shown that adults people judge acts of commission as morally worse than equivalent acts of omission. This tendency is called "omission bias." A developmental study showed that omission bias was found in younger children, but not in older children. Therefore, this bias might follow a U-shaped trend. The aim of the present study is to confirm whether there is the trend by using refined tasks obtained two preliminary studies.

【Key Words】 commission, omission, moral judgments

問題と目的

一般に、私たちの「悪い行為」には、動作や言葉といった言動が伴っている。たとえば、ナイフで人を刺して殺した場合、「ナイフで刺す」という動作をもとに責任が問われる。しかしながら、言動が伴ってなくても悪い場合がある。たとえば、溺れている人を助けずに立ち去って水死させた場合、「溺れているのに何もしない」という動きのない行為に対して責任が問われるはずである。実際に、刑法では、これらの2つの種類の行為が区別され、「ナイフで刺す」といった積極的な動作がある犯罪が「作為 (commission)」であり、「溺れているのに何もしない」といった積極的な動作がない犯罪が「不作為 (omission)」であるとそれぞれ定義されている (e. g., 船山, 1999)。

これまで、大人を対象とした多くの心理学的研究から、一般的な人間では、作為と不作為を比較すると、それらの行為を生み出した「意図」や、それらの行為によって生じた「結果」が同等であったとしても、作為の方が不作為よりもより悪いと判断する「不作為バイアス (omission bias)」が生じることが、繰り返し報告されている (e. g., Haidt & Baron, 1996; Spranca, Minsk, & Baron, 1991)。それでは、このような不作為バイアスは、人間の発達において、何歳頃から現れる現象なのであるのか。Baron, Granato, Spranca, and Teubal (1993) は、小学校2年生 (平均 7.3 歳) と中学校1年生 (平均 12.4 歳) を対象に、不作為バイアスがどの程度生じるかを検討した。その結果、小学校2年生では、77%の子どもたちに不作為バイアスが見られたが、中学校1年生では40%しか見られなかった。上記のように、大人では不作為バイアスが強く見られる (95%程度) ことから、不作為バイアスは、幼少期から既に存在しているものの、年齢が上がるにつれて、一度出現率が低下し、大人になるとまた強く現れるというように、U字 (U-shaped) 型の発達をすると解釈された。

ただし、このような不作為バイアスの発達過程を検討する前に、「作為と不作為のそれぞれを認識できるようになる上で、発達の差があるのかどうか」を確認しておく必要があるだろう。なぜなら、不作為バイアスを調べる研究は、「作為と不作為を両方とも既に認識できることが前提」となっており、それらを直接比較して道徳判断の程度を比較する手法を取るため、その前提が成り立つかどうかを確認すべきだからである。作為は、その動作が目に見えたり、その言葉が耳で聞こえるといったように知覚的に容易に認識できるのに対して、不作為は、動作や言葉がないため、認識しにくく、作為の方が不作為よりも年少の時点から理解できる可能性も考えられる。Hayashi (2006, 2007) は、4歳から11歳までの幼児と児童を対象に、作為と不作為の認識ができる時期に発達差があるのかどうかを検討した。その結果、6歳頃を境に、作為と不作為の両方を正確に認識できるようになるが、どの年齢においても、作為と不作為の認識に違いはなく、発達差は見られなかった。したがって、少なくとも6歳頃以降には、作為と不作為を直接比較する手法を取ることができると考えられる。また、5歳頃からは既に意図を認識して、道徳的な判断を始めることも報告されている (e. g., Karniol, 1978; Nelson, 1980)。

これを踏まえて、本研究では6歳以降の児童期の子どもを対象に、不作為バイアスが、人間の発達において何歳頃から現れる現象であるのか、その発達過程を詳細に検討する。Baron et al. (1993) が報告した結果のように、U字型の発達が見られるのか、それとも年齢が上昇するにつれて、不作為バ

イアスが生じる割合が増えていくという直線的な発達が見られるのか、その認知発達のな変化を明らかにすることが本研究の目的である。

予備調査 1

本調査では、Baron et al. (1993) の結果と比較するために、Baron et al. (1993) で用いられた課題のストーリーと違った課題を新たに用いる。そこで、予備調査 1 では、本調査での課題作成のために、課題として使える状況を探る。このため、先行研究 (e. g., Haidt & Baron, 1996; Spranca et al., 1991) や法律 (主に「刑法」) の専門書 (e. g., 船山, 1999) などを参考に、「作為」と「不作為」の定義の違いを確認した上で、作為と不作為の例を集めることを目的とする。ただし、子ども用の課題を作成するため、殺人といった凶悪な例ではなく、法的な厳密さよりも日常的な場面を想定し、回答を求める。

方 法

調査対象者 大阪府内の大学生 35 人 (男性 18 人, 女性 16 人, 性別不明 1 人; 平均年齢 20.2 歳)

調査用紙 B4 判の用紙の左側に、年齢と性別の記入欄を設け、その下に教示文を配置した。また、右側を回答とした。教示文では、まず、悪事について、積極的な動作がある場合とそうでない場合があることを例示しながら、積極的な動作が伴う場合を「作為」、積極的な動作がない場合を「不作為」ということを明示した。その後、「これは不作為だ (積極的な動作がない悪事だ)」と思う例があれば、自由に何でも書いてくださいと記した。その際、作為と不作為がペアになっていると有難いことと、「レストランで会計をしたら、誤ってお釣りを多くもらったが、何も言わず (訂正せずに)、家に帰った」、「前を歩いている人が、ハンカチを落としたことに気づいたのに、拾ってあげない (声をかけてあげない)」といった日常的な事例でかまわないことを教示し、凶悪な例ではなく、ふだん身の回りで起こっていることに注意が向くように誘導した。

手続き 大学の授業において、出席確認を兼ねて授業の感想を書いてもらう時間を使って、集団で実施した。所要時間は 10~15 分程度であった。

結 果

無回答者が 2 人いたものの、残りの 33 人から計 47 の例を得られた (ペアで回答してもらえたものが 9 例あった)。このうち、法律などと照らし合わせて、不作為とは言い難い例が 5 例であった。残りの 42 例について、意図の有無と、意図がある場合にはその内容に分けてまとめたものを表 1 に示す。

表1 回答の分類

意図							なし	計
あり								
不親切	怠け	無視	欺き	つり銭詐欺	親切			
17	9	6	3	2	1	4	42	

意図がある場合として、さらに6つに分類した。「不親切」は、「落とし物を拾ってあげない」「電車で席を譲ってあげない」「迷子の子どもがいて、泣いていても、見て見ぬフリをして助けない」など、故意によって不親切になる不作為の回答を当てはめた。「怠け」は、「借りたものをそのままにする(返却しない)」「電車の中で携帯電話をマナーモードにしない」など、やろうと思えばすぐにできることを、面倒がってしないと考えられる回答を当てはめた。「無視」は、「いじめに気づいても気づかないふりをする」など、関わり合いになるのを意図的に避けようといったニュアンスがある回答を当てはめた。「欺き」は、「自分だけお菓子をもらったのに、兄弟に言わない(で、一人で食べてしまう)」など、不作為によって、意図的に自分だけ利益を得ようとする回答を当てはめた。「つり銭詐欺」は、「おつりを多くもらったのに、黙って受け取ってしまう」という回答を当てはめた。「親切」は、「仲の良い子の悪事を黙っている」という回答を当てはめた。

これに対して、意図がない場合は、「重要な伝言があったのだが、忘れていて本人に伝えなかった」などのように、うっかり忘れていたことが原因で言動が生起しなかった例を当てはめた。これは、過失の不作為であり、刑法で「忘却犯」と呼ばれることもある。

考 察

以下、現在進行中のことであるため、考察と関連づけながら今後の予定を記していくことにする。まず、本研究の目的と照らし合わせると、意図が明確であることが求められるため、意図がない場合(過失の不作為)に相当する4例は除外する。意図がある場合の6つの分類については、課題状況を多様にするためにも、なるべく多くの分類から選ぶことを検討している。たとえば、意図的に気づかないふりをするという点では同じでも、「電車で席を譲ってあげない」場合(不親切に分類)と「いじめの傍観」(無視に分類)では、行為者の意味合いが違って来るだろう。また、「つり銭詐欺」は、相手のミスにつけこむものであるため、行為者があらかじめ意図を持って不作為をしている他の例と異質な面があるだろう。ただし、「つり銭詐欺」は、Baron et al. (1993)で既に課題として用意されているものであるため、重複を避けるために、もし用いるのであれば、状況を変えるなどの工夫が必要になってくるであろう。

なお、回答には、『知っている(気づいている)』のに…しない」という心的状態が明記されていたり、暗に必要とされる例が多数挙げられており、心的状態(とくに、知識状態)と作為や不作為の認識とが関連している(Hayashi, 2007)ことを追認した。また、教示文に左右されたと考えられる

回答（落し物やつり銭詐欺）も多く、教示文によって必要以上に方向付けされていた可能性も考慮しておくべきかもしれない。

予備調査 2

予備調査 2 では、予備調査 1 で得られた例のうち、子ども向けに使用できそうな例を厳選し、調整する（凶悪な犯罪的状況は、道徳的に見て軽度に違反した状況に置き換える）。その上で、Baron et al. (1993) の課題状況とあわせて、本調査に向けた課題を作成する。

課題の提示方法は、2 つの似たお話を子どもたちに提示し、「どちらがより悪いか」を判断してもらおう形式とする。この方法は、Piaget (1932) の研究以来、道徳判断の研究でよく使われている手法であり、Baron et al. (1993) の研究でも用いられた方法である。具体的には、行為を引き起こす意図と生じる結果が同じであるが、その行為が作為であるのか、それとも不作為であるのかという点だけを変えたお話①とお話②を構成し、それぞれ 4 コマ程度のイラストを添える。このようなお話①とお話②で構成されるペアを複数作成する。

その後、大人（大学生、大学院生）を対象にした予備調査を実施する。お話①とお話②のそれぞれを別の調査対象者に提示し、「行為を引き起こした意図の強さ」と「生じた結果の大きさ」を、それぞれ 5 段階で評定してもらい、お話①とお話②の間で、意図の強さと結果の大きさの評定に差がないペアを複数抽出する。

本 調 査

本調査では、予備調査 2 で精選したペアを、小学校 2 年生、中学校 1 年生に対して提示する予定である。具体的には、お話①とお話②をカウンターバランスして提示した後に、「どちらの男の子がより悪いことをしましたか？ お話①の男の子ですか？ お話②の男の子ですか、それともどちらも同じくらい悪いことをしましたか？」と聞く。その結果、「お話①（作為のお話）の方がより悪いことをした」と答えた場合、不作為バイアスが生じたと判定し、年齢ごとに、その割合を算出する。不作為バイアスが生じる割合を算出し、その発達過程は、Baron et al. (1993) が報告した結果のように、U字型の発達が見られるのか、それとも年齢が上昇するにつれて、不作為バイアスが生じる割合が増えていくという直線的な発達が見られるのかを明らかにする。

本研究の展望

道徳判断の認知発達を調べる研究は、Piaget (1932) のオリジナルの研究以来、数多くなされている。しかしながら、これらの研究で扱われている課題の状況は、言動がある場合の「作為」であることがほとんどであり、子どもたちが「不作為」をどのように認識しているのか、作為と不作為の間で認知発達に違いがあるのかどうか、ほとんど検討されてこなかった。作為と不作為の認知発達を調

べることは、子どもの道徳判断という心理的な側面と、言動の有無といった身体に関わる側面の関連に深くつながると考えられる。それゆえ、本研究で立てた研究計画が遂行された場合、幼少期の子供の可能性を引き出し、心身の調和のとれた発達をはかることについて、新たな角度から知見が得られるものと見込まれる。作為と不作為の理解の問題は、法律との関連も深く、人間の道徳的意識や法的な認識の問題にもインパクトを与えることができるであろう。

引用文献

- Baron, J., Granato, L., Spranca, M., & Teubal, E. (1993). Decision-making biases in children and early adolescents: Exploratory studies. *Merrill-Palmer Quarterly*, 39, 22-46.
- 船山泰範 (1999). 基本法学叢書 刑法 弘文堂
- Haidt, J., & Baron, J. (1996). Social roles and the moral judgement of acts and omissions. *European Journal of Social Psychology*, 26, 201-218.
- Hayashi, H. (2006). Young children's understanding of commission and omission. Poster presented at the 19th Biennial Meeting of the International Society for the Study of Behavioural Development, Melbourne, Australia.
- Hayashi, H. (2007). Children's moral judgments of commission and omission based on their understanding of second-order mental states. *Japanese Psychological Research*, 49, 261-274.
- Karniol, R. (1978). Children's use of intention cues in evaluating behavior. *Psychological Bulletin*, 85, 76-85.
- Nelson, S. A. (1980). Factors influencing young children's use of motives and outcomes as moral criteria. *Child Development*, 51, 823-829.
- Piaget, J. (1932). *The moral judgment of the child*. New York: Free Press.
- Spranca, M., Minsk, E., & Baron, J. (1991). Omission and commission in judgment and choice. *Journal of Experimental Social Psychology*, 27, 76-105.